

滋賀県余呉町の 1960 年代の焼畑と実地に学ぶ焼畑

火野山ひろば・滋賀県立大学 黒田 末寿

はじめに

私たち「火野山ひろば」が、滋賀県北の余呉町で焼畑を地域の人たちとともにおこなってきた5年になる。本論は、まずこれまで簡単な報告しかない余呉地域の焼畑について記述する。つぎに地域の人とともに焼畑を実践してきたからこそ、知りえた知識と築くことができた地域の人々との関係について述べ、実践型地域研究における実践とは何かについて考察する。

1. 焼畑の復興をめざす

かつて日本の山間地で普通にみられた焼畑は1960年代にほとんど姿を消した。私たち「火野山ひろば」は、その焼畑の復興をめざし、滋賀県で2004年から活動している小団体である。休耕地に火入れをして日野菜などの在来カブラの栽培をしたのち、2007年春、長浜市余呉町摺墨在住の永井邦太郎氏に出会って、その尽力により、同年8月、中河内の山裾斜面と余呉中之郷の赤子山スキー場の2カ所で焼畑ができた（今北 2010a、今北 本報告）。以来5年間、私たちは永井氏を師匠として、余呉で地域の人たちとともに毎年焼畑をおこなってきた。

私たちの山間地における地域研究、とくに焼畑にかんする研究は、荒れた山間地に生業の基盤を作り直し、ふたたび人々の生活の場にすることを目標にした「くらしの森」（今北 2010b、黒田他 2010）づくりの一環であり、地域の人たちとともに実際にやって、具体的な技術の学びと検証をおこなうことを方法にしている。生存基盤研究と生態学上の焼畑の復興がもつ意義（黒田他2010、六車他2007）については、以前に記述したが、要約すれば、山間地での耕作とくらしの技法と文化の継承、それによる近い将来に予測される食料危機への備え、里山環境の産出による生物多様性の維持、新しい環境技術と結合し持続可能で魅力的な生活スタイルを確立し若い人たちを呼び戻す、それによる耕地・野山の保全、などをあげることができる。

また、焼畑に限らず、山間地で長年持続的にくらしを成り立たせてきた先人の知恵は、いずれも持続型社会形成にとって貴重な情報である。「くらしの森」づくりには、こうしたことの聞き取りと実践による学びが欠かせない。「くらしの森」づくりは、現代化の波で周辺に押しやられ、無価値なものごとくされてきた山里の文化とそれを担ってきた人々に光を当てるのだが、それが第一義ではなく、最終的にはそれを発展的に受け継ぐことを目標にしている。

2. 「実践型地域研究」としての焼畑

このように地域で実践的におこなう研究は、地域の人々が研究過程に直接関与することを排除する従来の研究や、コントロールされた実験状況下でおこなう研究とは異なるつぎのような性格をもっている。第一に、「地域の主体性」と表現できるような、地域住民のかかわりがあること。第二に、研究が行われる条件の複雑さ、流動性があること。焼畑の場合、場所ごと年ごとに土壌や水分や生態系が違ってくるとし、気象条件も違うから、不作豊作に影響を与える要因を取り出すことが容易にできなかったりする。さらに、かつての焼畑周辺の生態系と現在のそれとは大きく違うから、両者の比較も簡単にはできない場合が起きてくる。第三に、地域の当事者からも隠れていた情報が関与する可能性や、第四に、身体知とでもいうべきレベルの表現しにくい技能が、実践によって見えてくることがある。第五に、

かかわってくる情報と表現上の雑多性・多様性がある。

第一の地域の関与は、研究の前提を構成する。たとえば、私たちの研究においては、焼畑の技法を学ぶのであるから地域の人とともに実践することになるが、その賛同を得られなければ、いくら学問上の意義や将来の夢を語っても実施できないかぎり、意味は失せて、地域・研究者双方の失望に終わるだけである。とりわけ、半世紀にわたって山の火入れを禁断の所業にしてきた（法的に禁止したのではなくキャンペーンによるのだが¹）日本では、かつて焼畑や茅原に火入れしてきた地域でも、山の火入れを現在おこなうことに大きな抵抗感がある。また実際、山の多くを燃えやすいスギ・ヒノキ林にしている現状では、延焼の危険とその被害の規模が格段に高くなっている。この障壁を越えるのは私たちではなく、地域の人たちである。私たちは、それを支える側になるが、私たちの関わりとビジョンに地域の側からの信頼がなければ、地域の人々はあえて危険をとまなう焼畑に踏み切ることはない。この研究者への「信頼」ということも、じっさいはさまざまな形があり、研究者自らの姿勢の正しも含めて動き出してみないとわからないことが多い。現段階では少なくとも、たんに実験データをとるのではなく私たちがその経験を地域と自分たち双方の生活に生かすことを目指していること、その了解がキーのひとつといえる。

したがって、私たちの研究を安藤和雄（本報告）による「実践型地域研究」の用語にならって言えば、「地域の主体性を前提にし、その生活に生かすことを目的にした地域の生活・文化・自然の研究」ということになる。このことは、結城登美雄（2009）、吉本哲郎（2008）らが展開している「地元学」の精神と相補関係にある。地元学は、簡単に言えば、地域住民が主体になった、地域の風土・資源・人々を生かす地域づくりの運動である。この運動は、自らの地域・風土そして自己の肯定から始まる。そうでなければ、地域の風土・資源を生かす眼をもつことは、不可能になる。また、他所からの資源や資本、外部の人材にたよることも、地域住民の主体性を損ない、自身の価値と可能性を否定することになる。もちろん、外部からの新鮮なまなざしや研究者の意見も尊重はするが、それは地域の固有性と地域住民の主体性、互いの対等性を、外部者が認めたうえでのはなしである。換言すれば、地元学のいう地域の主体性には、研究者や行政との知および政治的ヒエラルキーの否定が含まれている。さらに、その主体性から、運動の面でも環境学の意味でも持続可能性への志向性が帰結する。外部からのエネルギー・資本の注入と指示への受動的応対ではなく、現に自分たちがもつものを生かす運動なのだから。このように考えると、研究者の側から地元学に即応するとき、安藤のいう「実践型地域学」が現れることになる。本論は、まず、このような前提をもって成り立っていることを確認しておきたい。

第二の場所や年ごとあるいは前年の作物で異なってくる自然条件は、フィールドワーク一般に共通していわれてきたことだが、実際にやってみないとわからないことに満ちている。焼畑であれば、予期せぬ天候の変化、虫害などを経験して初めてその変動の重大さに気付くことがある。そこで自然の巡りと先人の知恵の深さに驚くだけでなく、私たちの工夫の余地も出てきて面白いのである。綿密にデータを取りながら、長期におこなうこと、過去の出来事をよく聞き取ること、そういうことの積み重ねで乗り越えるしかない。

第三のことがらは、具体例を挙げた方が早い。私たちは農耕の自然エネルギー化のために、2頭の子牛を使って昔の経験者と牛耕の実践を試みてきたが、最初は、人間が後ろに立つことを牛が嫌がり訓練にならなかった。これは操牛法以前のことで、テキストには何も書いていない。ところが、やっているうちに経験者が牛の後部を丁寧にブラッシングすることで、人が後ろに立つことに慣らすのに成功した。振り返って考えてみると、操牛法のテキストが作られた昭和30年頃までは、博労が数頭の子牛を先に歩かせて村々に連れてきていた。つまり、その時まで博労が操牛の基礎訓練をしていたとわかったのである。また、牛の訓練を始めるのは2歳前後がよいとされていた。しかし、これも役に立たなかった。その後の品種改良で牛の成長が早くなっていたからである。焼畑でも、夏の火入れで春の山菜が採れることがわかったことなどが、この好例になる。

¹ 山の火入れは禁止されていると思われるが、法的には施業上必要な火入れは、周囲の土地所有者の承認を得て、適切な防火準備をととのえて消防署へ届け出れば認可される。

第四の身体知とでもいうべきレベルの技能も、フィールドワーク一般に共通していわれてきたことである。とはいえ、機械化が進み身体を使う作業が生活の中からなくなり、スポーツを除けば単純な動きだけになったような現代生活者にとって、山でおこなう作業は未知の領域といってもよい気がする。そのことは、山の作業に疑いもなしになんでも重労働という形容詞をつけることにも現れているだろう（黒田 2010）。さらに、スポーツや武道の型と違って、山や農地の作業の動作は、一定程度の安全性と能率さえ確保できればよいので、個人差がおおきくなる。これも慣れてきて初めて、こうするのもああするのも危険を避ける方法で、どちらでも自分に向いた方をやればよいとわかってくる。しかし、これらの点については実践型地域研究の趣旨から少し離れるので、以下では扱わない。

第五の情報と表現上の雑多・多様性は、生活事の雑多性に近く、科学論文が最も嫌うところである。しかし、「くらし」を実践するには、要因・要素を単純化できるわけではないし、実践にともなう人間関係の要素を捨象して実践型地域研究は成り立たないことは、第一の性格からも明らかである。地域の主体性の尊重は、実践研究の成果が地域と共有されることが第一条件であり、表現は価値観と一体であることを銘記すべきである。したがって、資料化する場合は、地域住民に伝わる表現と、地域住民が表現した感覚や感情を表す工夫が必要である。たとえば、焼畑を見た目と現代感覚で「重労働」と表現することは、山に慣れた体験者が収穫や工夫の結果を楽しみにしながら楽々と作業することと合わないばかりか、異なる価値評価になってしまう（黒田 2010）。さらに、地域の言葉、言い回しなども地域住民にとっては重要である。学術雑誌の現状では、こうした雑多性のある程度は排除し、焦点を明確にして「無駄」な表現を省かなければ、論文として体裁が整っていないと拒否されるのがおちであるが、実践型地域研究を生き生きとした実践現場の情報も含む、幅広い分野にするには、その論文形式の限界を拡げることと表現方法の工夫が大きな課題になるといえる。

3. かつての余呉の焼畑

3.1 焼畑の用語

余呉町の焼畑は、1960年代まで高時川上流沿いの中河内から半明、針川、尾羽梨、鷲見、奥川並などから菅並までの奥丹生地域と、中河内の南の椿坂、摺墨川上流の摺墨集落でおこなわれていた（余呉町誌 1995；東洋大民研 1970；同志社大民研 1969；余呉町教育委員会 1991；位置に関しては朽木FS活動報告地図を参照）。

鷲見集落出身の80歳代の久保吉郎氏を含めて、余呉地域で聞き取りした人は春焼きをおこなっておらず、もっぱら夏の火入れの焼畑で1年目はカブラ（ヤマカブラと呼ぶ赤カブ）、ダイコン、ソバなどをつくっていた。雑穀をつくるときは、2年目の焼畑を使う。いずれも自家用で1反以上の焼畑をつくる人もあったが、ほとんどが数畝に満たない規模だった。そういう小規模の焼畑だったせいか、湖北における民俗学・地理学の調査は少なくないにもかかわらず、関心はあまり持たれなかったようで、余呉の焼畑の記録はごく簡単なものばかりである。

焼畑を東隣の岐阜では「ナギ」「ナナギ」（橘 1996）、南隣の木之本町や伊吹町では「カノ」「カンノ」と呼ぶが（賀曾利 1983、竹本 1991）、余呉町ではどの集落でも、山の畑を総称して「ヤマバタケ」、または「ヤマノハタケ」と呼び、とくに焼畑を指すときは「ヤキバタ」「ヤキバタケ」と言った。ヤキバタケをさらに、作物でカブラバタケ、ソババタケ、ヒエバタケ、アズキバタケというように呼んだ。

ちなみに「カノ」「カンノ」は、東北から中部の日本海側の焼畑呼称である。それが滋賀の北東部に飛び地的にある理由はわかっていない。

余呉では、焼畑に関する特別な用語とみられるものはあまりない。これまで聞き取りできた焼畑用語は、聞き取りで得た「コツヤキ」と『余呉町教育委員会報告書1991』にある「ハダレ」である。コツヤキは、他の地域でも使われる言葉で、火入れ時に燃え残った木枝や根を畑地の数カ所に集めて燃やすことをいう。焼畑が盛んだった頃は、夕方4時頃から火入れをすることも多く、暗くなるとコツヤキの火の中にコオロギなどの虫が跳んで入ったので、中河内

では「コオロ (=コオロギ) 焼」と呼ぶこともあったそうである (島上 2011)。

ハダレは、柳田国男の農業用語集にも焼畑の関連書にも類語が見つからない。『余呉町教育委員会報告書』では、焼畑の適地の呼称としているが、菅並の聞き取りでは、焼畑を繰り返してそれ以上使えなくなった土地を指すとのことだった。驚見で1990年近くまで焼畑をしていた久保氏によれば、ハダレは焼畑の跡でアラシたところということだった。アラシというのは、土地を放置して草や木が生い茂るままにすること、すなわち、休閑を意味する。したがって、アラシが十分であれば焼畑の適地になり、耕作停止後間もなければ、もう作付けができない土地を指すことになる。つまり、ハダレは、どちらの意味にもなるということである。

賀曾利 (1983) は、中河内で1年目の焼畑をアラバタケという記録している。これは広く使われている用語である。

3.2 作業手順と作物、作り直し

久保吉郎氏に聞き取ったことを中心に作業のあらましを述べよう。

焼畑で儀礼めいたことはしない。これは余呉中でそうであった。ただし、竹本 (1991) の菅並での聞き取りによれば、火入れ前に塩をまいて清める場合もあった。

8月のかかりから草刈り・伐採をした。カブラ用 (1a ほど) は半日、ソバ用 (10a ほど) は3、4日かかった。このとき、上方と側方を1.5mほど「刈り下げ」て、防火帯 (とくに名称はない) にする (防火帯の幅は文献により4、5尺~2間ほどと違うが、いずれも聞き取りで実測はない)。火入れの直前に地面をさらに下方に搔いておく。

盆の間に家族か一人で火入れし (久保氏は、「盆仕事」という表現をしている)、翌日に種を播いてからヒラグワ (=唐鍬のこと、中河内ではトンガーと呼ぶ) で鍬打ちした。竹本 (1991) によれば、菅並では、火入れでまだ地面が暖かいうちにヤマカブラを蒔くことも多かったし、種蒔きの後、上手から下手に向かって種を灰に混ぜる程度に軽くヒラグワで打った。摺墨の永井氏の方法は、順序が逆で下方から上方へ向かってややしっかり鍬打ちしてから種を蒔く (鈴木 本報告)。中河内では、浅く鍬打ちしてから播種した (賀曾利 1983)。

天候次第で朝か夕方4時頃に火をつけた。竹本 (1991) は、中河内では、火入れは、夕方が明け方早くだったと聞いており、菅並の場合も同様で、明け方の場合は露が残っていた時間から火入れした。火付けは上方風下から。あとで燃え残った枝木を集めて燃やす。これをコツヤキと呼ぶ。

火入れの1年目は除草しなくてよかった。2年目も除草は1度ぐらい。

1年目にソバかカブラを作るかで、畑の広さと選ぶ土質が異なり、作物の作り廻しも異なる。よい土地では4年間作付けできた。つくり回しの例は、以下の通り。

・ソババタケ→ヒエ/アワ (6~7月に植えた) →アズキ (→アズキ/エイ=エゴマ)

ソババタケはだいたい3年で放棄。3年目にサツマイモやサトイモを植えることもあった。アワ/ヒエは昭和30年頃まで作った。

・カブラバタケ→アズキ→アズキ→アズキ (→エイ)

カブラバタケは4年使うことが多く、さらにエイ (エゴマのこと) を植えることがあった。エイバタケの後はアラシ (耕作停止=休閑)。この作付け・つくり回しは、余呉の他地域でもだいたい同じであるが、永井氏によれば、摺墨ではエゴマはつくらなかった。

白山麓や東北などで1年目に作付けするヒエを2年目に植えたのは、春焼きが危険でしなかったためだけか、他の要因があったのか、確かめていない。久保氏は、春焼きをしなかった理由を、山が茶色で火がくすぶっていてもよく見えず、山火事になりやすいからと説明している。火が見えにくいだけでなく春は木々が乾燥しているから余計に危ないわけである。

カブラバタケの間引きは1度だけで、それ以上やるとカブラが痛んで病気になるとされた。カブラは11月の中旬

までに収穫し、半月日干しし、しわがはいったものをぬか漬けにした。雪が降ったあとも畑にほうっておくと割れて堅くなる。肥やしをやると育たず、また、畑で作るといいのができない。種取りには、カブラの下 1/4 ほどを切って植え直し採種する。余呉では、こうすると他のアブラナ科野菜と交雑しないと言われている。

久保氏によれば、焼畑のソバは、実は小さく尖りが少なく丸みがあり、春蒔きしても実がならなかった。余呉ではエイと呼ぶエゴマは、やせた土地でもできるので最後の作付け作物である。4 月末には播き、11 月に収穫した。5、6 平方メートルもあれば、2 升は取れ、年に 1 升もあれば料理用には十分だった。

余呉の摺墨では、作付け放棄の前に自生してくるヤマグワを育て、放棄後はその葉を取って養蚕に使った。樹勢が弱ってくると放置して、10 から 15 年ぐらいでまた焼畑にした（永井氏談）。

3.3 ヤマカブラ

かつての余呉の各集落には、焼畑でもつばら作られる在来種の赤カブがあり、ヤマカブラと総称されていた。青葉高（1981）は、やや扁平な円形タイプの赤カブのみを記載しているが、集落ごとに形態が違っており、たとえば久保氏によると、鷲見のカブラは主根が短く、何かの拍子で倒れて転がるような丸い形をしており、葉は茎の下が赤く固くて毛があり、短くて散開していた（青葉のいう西洋系の特徴）。これに対し、摺墨のカブラは少し細長く、中河内のカブラは扁平の丸形だった。いずれも水平に切ると中は白で芯側に赤い斑点が多くあり、漬け物にすると全部が皮と同じ赤に染まった。どこの集落でも、焼畑でできた山カブラは、シャキッとした歯ごたえに甘みがあって、美味かったと言ひ、里の畑でつくったものは水っぽく美味しくない、と一様に言う。

現在は、各集落由来の山カブラが混雑し、太いニンジン状の長いものから扁平の球状のものまで多種の形態が入り交じっている。また、久保氏は、皮が厚く美味なくなっていると厳しい評価をする。私たちの焼畑でもつばら作っているのは、この多型になった山カブラである。これを元通りのいくつかの形態に単離すべく選定をしているところである。

4. 焼畑の技法を学ぶ

4.1 地域との関係

焼畑は前に書いたように、延焼の危険があるため、地域の方の了承だけでなく安全な方法を地域・研究者ともに確認しないと、実施には至らない。いくつかの候補地に相談に回ったとき、感じたことの一つは、焼畑や山の火入れを幼いときに経験しただけでは、火の扱いに対する自信より、怖さの方が記憶されている場合があり、かえって焼畑に強く反対することになるということだった。中河内で集落中が焼畑の思い出を懐かしく語り、火入れに協力してくれたのは、集落の主だった人たちが 70 代で、自分たちで焼畑を経営してきた自信があったからだろう。焼畑でつくったヤマカブラをもう一度食べたいともいわれた。また、2011 年の収穫祭では、1960 年代の中河内の写真や空中写真を地域のの人に見てもらったが、もっと日当たりなどの条件がよい昔のヤキバタを使って、ヤマカブラをつくってほしいとも提案された。最初に述べたような地元学への補完としての実践型地域研究と言うには、まだ、おこがましいが、これまでの 5 年間の継続で、相互に信頼がうまれてきているのを感じることができた。

ここまでの継続が可能だったのは、永井邦太郎氏の尽力のおかげである。余呉の地域との信頼関係は、永井氏を通じてできたものだからだ。この実践研究は、70 歳を超え足も悪いながら急斜面で超人的と思えるほどの作業量をこなし、地域では私たちのために根回しをする永井氏に、仕事でも地域での作法という点でも多くを学んだ学習過程でもあった。「くらしの森」づくりという点では、道はまだ遠いが、焼畑の作業手順は、のおかげでなんとか自分たちだけで行える力を獲得しつつあると言えるまでになった。

4.2 土地選び

中河内で2007、2008年に焼畑をした場所は、高時川上流の支流そばの西向き斜面で、雪崩場とケヤキやエノキが生えたその隣接地だった（写真1）。焼畑は森林を伐採しておこなうイメージがあるが、余呉では多くの場合はそうではなく、集落近くの雪が上方から流れて木が育たない雪崩場がよく使われたとのことだ。余呉では江戸期には記録されている「切替畑」を意味する名称が、現在全く伝えられていないのは、そのせいかもしれない。ただし、炭焼き小屋のそばで小規模な焼畑をやることも多かったそうで、そのときは当然ながら、炭用の雑木を伐採した跡を焼き払って使っていた。

雪崩場なら木を切る手間がかからないし、こういう場所の下方には落ち葉や腐植土が溜まり肥えた土壌になる。焼畑候補地の雪崩場の下部約20メートルほどには、ススキ、シシウド、スゲ、イタドリが生えていた。その上はススキ、スゲ、シダ類が多く、永井氏はその間で線引きして焼畑の境界にした。その理由を、下の方の土は肥えているが、上はよくないと教えてくれた。たしかに石の間に見える土は、雪崩場の下部では黒っぽく上部では少し薄くて腐葉土が少ない。

といっても、斜度が35度ぐらいいはある（10000分の1の地図ではそれ以上ある）（歩くのに苦労する斜面は、手のひらのような平べったい大きい石ころばかりで覆われている（写真2）。白山麓ではこのような雪崩場も焼畑に選ぶと文献（橘 1996）で予備知識はあったはずだが、私には、最初はとてもカブラなどが育つとは思えなかった。ところがやってみると、カブラは石の上でも発芽し、根を石の隙間に伸ばしてやがて立派に育ったのである。カブラの本体は石と石の隙間の間に乗り、根が土壌に入っている格好になる。一方、ダイコンも、石と石の隙間の中に本体の下部を入れてまっすぐに育った。石が邪魔して二股になるかと思っていたが、そうなるのはまれであった²。



写真1 中河内の焼畑（雪崩場）中央下部が焼畑地。



写真2 石だらけの斜面に芽生えたヤマカブラ。

江頭ら（2008）によれば、温海カブなど山形の焼畑で栽培されているカブ（青葉の分類による西洋系で種の表面に毛があり水を含む性質をもつ）は夜露でも発芽し、必要に応じて根または芽を10センチメートルほども長く伸ばす。これは、石混じりの土壌に適応した性質だ。石と石の間に落ちてまた石の上でも根を土に下ろすまで乾燥しすぎなければ、十分育つということだ。あとから教えてもらって、ヤマカブラもそうなのかと納得したが、直径2ミリメートル以下の小さいカブの種がそうした能力をもつとは、やってみなければ容易に信じがたいことである。

焼畑には、やや南面よりの東から西向き斜面を利用する。私たちの焼畑には、9時半頃から陽が当たるところ、14時半には陰ってくるところがあったが、カブの場合、このぐらいの日当たりがあれば、播種時期さえ守れば十分収穫

² これに対し、別のところで植えたものだが、ニンジン型のカブである日野菜は、石があると曲がったり二股になるものが多かった。日野菜は山で得られた野生のカブを明治期に改良したと言い伝えられ（瀬川2000）、青葉（1981）の分類では和系のカブであるが、焼畑にはむかない可能性が高い。

が得られるとわかった。ただし、2011 年は天候が悪く、火入れと播種が 10 日ほど遅れて 8 月末になってしまい、その後も天気はあまりよくなかったから、14 時半に陽がかけるのが痛手になってしまった。

平地の農業に慣れた者には、斜面の傾斜度には文献で読んでいても面食らう。焼畑が非難されるひとつの要因は、傾斜地から植生をはぎ取ることによる土壌流出である。しかし、これまでの経験では、こうした傾斜でも小面積で伐開している限り、雨が降っても大して土壌は流れないし、種も芽生えると流れることはない。ただし、蒔き立ての時に夕立なみの雨が降ると土壌表面の種が流れて細い帯状に集中してしまうから、数日後、発芽状態をチェックし、場合によっては、追い蒔きをしなければならない。

4.3 伐採・草刈り

木が生えている場合、焼畑で燃やすのは木の枝だけで、幹は木炭やキノコ栽培に使った。また、かつての焼畑ではツルや灌木の根をできるだけ取って、播種面積を増やし、また、再生した灌木やツルが作物と競合しないようにしたが、私たちは土壌の流出を防ぎ、また、手間を避けるため、根は適当に残している。

伐採時期は木の場合と草原の場合で異なる。私たちの焼畑の一つは、スキー場でススキ、ヨモギ、イタドリ、ワラビ、ミゾソバなどの草原である。素人目には早く刈っておけばよいと思われたが、こうした草は、火入れの 1、2 週間ほど前に刈り倒すのがよいらしい。作業スケジュールがとれなくて 1 ヶ月も早く刈ってきたが、雨に打たれ、へたれて地面に密着してしまうためかえって乾かず、燃えにくくなる。焼畑は刈り草だけより木も燃やした方が作物のできがよいので、草やツルが主の草原には、他所から小枝などをもちこむのがよい。

木の伐採は、火入れ 2 ヶ月前には済ませ、燃やす枝を乾燥するように幹から切り離しておく。火入れ（夏焼き）の後、ヨモギとイタドリの根は新芽を出しカブラが負けるので除草が必要になるから、それらの根はある程度除いておいた方がよい。ただし、根を取るのはかなりの手間で、秋の収穫を考えるだけなら芽が出てきたとき除草の方が簡単である。芽吹いたヨモギやイタドリは山菜としても利用できる。

伐採・草刈りの労力は、道具と植生で大きく異なる。草刈り機やチェーンソーを使って、草原なら 1 反を数人で半日、雑木林なら 1 反を数人で数日間というあたりだろう。

4.4 火入れ

(1) 火入れ日

私たちは夏焼きしかしておらず³、火入れは盆過ぎに燃やすものの乾き具合と天候を見ておこなう。主要作物であるヤマカブラは、盆過ぎに植えると早いものが 10 月から収穫できはじめ、11 月始めに残らず収穫し終える。それを日干しにしてしばらくすると初雪が降る算段である。場所の日当たりと天候がよければ、9 月初旬に火入れ・播種しても何とか収穫できるが、8 月下旬までに火入れ・播種する方がよい。

(2) 火入れ準備・防火帯

火入れは焼畑作業中もっとも危険な作業である。延焼を防ぐには、人数が多いほうがよい。山の火入れは禁止されていると思われるが、法律的には施業上必要な火入れは、周囲の土地所有者の承認を得て、適切な防火準備をととのえて消防署へ届け出れば認可される。

防火の基本は、防火帯・防火係の設置を含む火入れ技術であるが、今日ではより安全にするため、事前に防火帯付近に水を撒く、消火ポンプを用意する、トタンで上部 4 分の 1 ぐらいをコの字に囲むなどの措置をとる。トタン囲いは永井氏の発案で、火入れ後はそのままシシ垣に使えるので便利である。防火帯はどこも 2 メートルほど取っており、

³ 春焼きは、2007 年 4 月に今津町棕川で一度おこなった経験がある。これは、滋賀県湖西地方でかつておこなわれていたホトラ山（草肥山）の山焼きの再現で、カヤ原の斜面にヨシを持ち込んで火入れした（写真 7、黒田 2007）。

とくに上部では火入れ前に腐植土を掻き取って内側に移動させておく。乾いた腐植土はよく燃え、火が見えにくいというえに消えにくいので、延焼の元になるからである。

(3) もやすもの

余呉では焼畑で燃やす木枝や草の名称はない。単に、もやすもん、もやすもの、である。火入れの目的は、灰を作るだけでなく、雑草の種を焼き、害虫を殺し、焦土効果（鈴木、本報告）でチッソとリンの有機物を無機塩に転換して作物が利用できる初期肥料をつくりだすことである。そのために必要なことは、表土が熱せられるよう、まんべんなくゆっくり燃やすことが必要と言われている。

したがって、燃やす柴の枝が地上から浮かないように切っておき、まんべんなく散らしておく。スキー場の火入れではスギの葉枝を使っている。湿っている刈り草や柴は数日前に掻いて起こしておく。刈り草は乾いていればどう扱ってもよいが、湿っている場合は、柴の上に掛ける。

燃えるものがどれほどあれば有効なのかは、定量的なデータをとっていないが、これまでの経験では、土壌条件によってことなり一概には言えない。2007年の雪崩場（約7畝、写真1）の火入れは、燃やすものが足りず、少量のスギの小枝を持ち込んだが、まだら焼けで全体の半分ほどはまったく焼けなかった。しかし、土壌がよかったせいか、カブラは、焼けたところ、焼けなかったところの区別なくよくできた（写真3、4）。これに比べ、同年のスキー場では、明らかにスギ葉がよく燃えた場所の方が、できがよかった。



写真3 2007年はあまり焼けないまま鍬入れし播種した。



写真4 2007年豊作のヤマカブラ



写真5 2007年播種1ヶ月後のヤマカブラ多形化している。

ただし、燃やしすぎは必ずしもよくない。2005年の日野町鎌掛では、ススキ原になった平地の休耕地で、柴を幅40～50センチメートル、厚さ15～20センチメートルほど積み上げて燃やして、日野菜を蒔いた。このとき、余った柴を多めに積み上げて燃やしたところでは、ほとんど発芽しなかった。灰が数センチメートル以上になると、表面を少し鋤込んだだけでは、カブラの発芽率はかなり低くなり、その後の育ちもそれほどよくない。

2010年の中河内の焼畑は、ササ原（イブキザサ）の斜面だった。ササ・灌木用の草刈り機が功を奏したが、手作業ではたいそう手間がかかっていたはずである。驚見では、ササ原は焼畑にしないというかつての聞き取りがある（同志社民研 1964）。その理由はおそらく、人力では刈り取りが大変な手間になることと、ササは火力が強く刈った量をそのまま燃やすと危険だからだろう。実際は、トタンの囲いや防火帯を幅広く取っていたこと、事前に防火帯付近に散水しておくなど、永井氏の指示で問題なかったが、こういうことをしていなければ、延焼の危険が高かった。こ

の火力のせいだろう、翌年にはササはほとんど芽吹かなかった。

(4) 火入れ

火入れの際には、火に直接関わらない人も燃えにくい木綿製の長袖・長ズボン、底厚の靴、軍手（皮製がよい）、帽子などを身につける。火を扱う者は、長柄の鎌、トビクチ、軽めの長柄の鍬などを用意する。炎天下で火を扱うから必ずスポーツドリンクかお茶をこまめに飲み、疲れたら木陰で休む。作業量によっては、1時間に2リットル以上水分を補給しなければならない場合がある。

火付けは長い枯れた竹竿を使うと火を扱うにも便利である。上方風下から順次上方風下へ点火していく（写真6）。下部からつけると、上部に一気に燃え上がり延焼や事故につながるから絶対にしてはならない。また、焦土効果をあげるには、ゆっくり燃やすのがよいとされ、そのためにも火が上から下へ下るように火入れする。

このゆっくり燃やすほうが、地面が焼けてよいというものも、実際やってみなければ実感がわからない。よく確かめる機会があまりないが、スキー場の火入れで風にあおられて下方から上方へ火が走ったとき、枯れ草の上部だけが燃えて下部が燃えずに残されていたことがあった。また、火勢が強くなると上昇気流を起こすため、燃え広がりを防ぐ「迎え火」と呼ばれる技法が可能なことも少しわかってきた。これらのことは危険でもあり、習得のために練習するわけにはいかないが、貴重な知識には違いない。

各地域には時間と地形による風向きの傾向がある。それを知ることがまずは大事であるが、風向きは突然変わることもあるので、慎重に対処する。火勢が強くなるとつむじ風が起きて（写真7）火の粉や燃え残りを防火帯の外に飛ばすことがある。勢いよく燃やしてもメリットがあるわけではなく、危険なだけである。

火入れの危険はよくわかっていていろいろ準備をしておくのだが、それでも火入れの度に一度はヒヤッとすることが必ず起きる。万一火が防火帯を超えそうになったら、早めに火をたたき、散らして火力をゆるめる。火をたたくとき、防火帯の外に火を跳ね上げないよう、押さえるようにたたく。

一反ほどなら、1、2時間で火入れの第1段階が終わるが、木や根の燃え残りが多く残る。これらをあまり焼けなかったところの何カ所かに集めてコツヤキをする。コツヤキを集中すると灰が多くなりすぎて、その場所のカブラの発芽が悪くなる。上手に分散すれば、火入れの面積をずいぶん増やすことができる。



写真6 上方風下から火をつけ、下方へ燃え下らせる。



写真7 火勢が強いとつむじ風を起こす。2007年棕川でのホトラ山焼き再現（春焼き）。

4.5 種まきと鍬入れ

焼畑では火入れの後、種まきの前か後に、軽く表面を掻くように鍬で耕す（写真3）。場所と状況によっては、耕さなくてもよいし、そうする地域もある。種は、手首のスナップをきかせて均等に薄蒔きするが、人それぞれ癖があつ

て定番的な蒔き方はない。棒をたてたり、燃え残った木の根、張ったロープなどを目印に目安を立て、均等に蒔く。

鋤入れは、私たちは下方から上方に向かってやっているが、竹本（1991）は菅並では上方から下方にすると記録している。福井の河内町でも上から下だったが、たぶんたいした違いはないのだろう。山形の温海カブラなどは、まだ地面が暖かいうちに種を蒔くほうが発芽率がよい（江頭 2007）。熱帯のパイオニア種、ことに火事の後にいち早く芽生える植物などは高温で種子の休眠が解けるが、それと同じ性質が選択されたものと推測される。

4.6 雑草・山菜の芽吹き

盆あけに、火入れをすると、春に芽吹く山菜が採れるというのは、聞き取りでも文献でも全く聞かなかったことである（写真 8）。休耕地に火入れをすると、夏でもワラビが出るのは以前の経験で知っていたが、あまり注目していなかった。余呉で初めて焼畑をおこなったとき、中河内ではシシウドとワラビの新芽が出て楽しんだが、この現象のおもしろさの重要さに気づかされたのは、スキー場でヨモギの新芽が大量に出たのを、「いい草餅ができる」と言って、今北研究員が採集し始めたことによる。ヨモギがはびこるようなところは痩せ地だから、かつての焼畑ではあまり使わなかったに違いない。普通の焼畑で火入れの後芽吹いても少量だっただろうし、邪魔な雑草として除草されたかもしれない。スキー場の草原という、かつてはあり得なかった場所でおこない、また、根を取るのが手間ではなかったからこそ、気づく環境ができたと思われるが、今北研究員の言動がなければ、私は注目しなかったろう。焼いた後出てきたのは、ヨモギ、ゴマナ、シシウド、イタドリ、ワラビ、フキ、アザミである。これからすると、多年草で根に栄養を蓄える植物なら、火入れで新芽を取れる可能性がある。ただし、ヨモギの新芽はちゃんと取らないとカブラを圧倒して、カブラの育ちが悪くなる。



写真8 火入れ後にヨモギ・フキが芽生えた。上方はユルギカブラ。

4.7 間引き・収穫

間引きは、播種後数週間ぐらいから適時おこなった。ヤマカブラは、1ヶ月ぐらいから小振りだが、早いものが収穫できる。普通は、2ヶ月～2ヶ月半で収穫し、半月程度日干しして漬け物にする。収穫量は、永井氏によると1平方メートルあたり玉重量で1～2kgの目安ということだった（鈴木 of 章参照）。しかし、中河内の2011年の収穫は、双葉から本葉が数枚の段階でコオロギの食害にあい、壊滅状態だった。同年のスキー場の収穫もよくなかったが、中河内ではよく燃えなかった上部の一角に植えたカブラはコオロギの食害にあまりあわずにそこそこに収穫でき、スキー場の方は、草に少し隠れたところで大きくなったカブラが多かった。これらの原因は、よくわからない。

5. 実践の意味

最後にこれまで述べてきたことを、実践との関係で整理しておこう。

5.1 実践知

これまでは、焼畑を実際にやることで得られた知識について述べてきたが、後で考えると、文献に書いてあることもあり、ちゃんと考えれば想定可能であったと思われることや、わかっていたつもりだったのに実際にやってみると、本当にはわかっていなかったことに気づくようなことであった。このように実践でそれと気づく知識をとりあえず、「実践知」と呼ぼう。実践知は、失敗したときにとりわけはっきり現れる。私たちは、何かに失敗したとき初めて、

こうしておけばよかったと気づくことがよくあるが、じつはそういうことは前からわかっている場合が多いからである。生存基盤研究もじつは、人類が危うい生き方をしていることに半分気づいているからこそ成立しているのだが、周りの人々も、それを問題にしている私たち自身も「本当にわかっている」といえるかどうか、じつのところあやしい。3・11の大災害は、社会や経済のシステムが不全になったときに社会の崩壊を防ぐのは、自立分散型の資源・エネルギー生産・供給システムであり、地域住民同士の支え合いであることを、教訓として残したが（環境省 2011）、日本がそういう方向へ具体的に向いているとはとうてい言えないからである。

それはともかく、実践知の存在は、頭での「わかり方」が生半可で、実際にことが起きて事後的にしか、「本当には」わからないことがあるということだ。他方で、実践知には身体知のように、やっているうちに身につく、当人には当たり前になっているものがある。こういう実践知は、現地で熟練者と一緒にやってみて、その存在に気づくことが多い。野山で働いてきた年寄りたちは、藁一本の扱いも機能的で美しい。その人たちの生活がそうした身のこなしや技を磨いてきたに違いないが、そういう人がいなくなったり、その実践知が培われた環境が失われると、最初から存在しなかったに等しいことになってしまう。

私は、焼畑の実践知に関しては多少以上知っているつもりだった。子どもの頃、手作業の農業を手伝っていたし、山火事を火に囲まれながら消火の手伝いをしたこともあるし、アフリカの熱帯林で自分の焼畑の火入れをしていたからだ。日本の焼畑のやり方は論文やビデオで「知って」もいた。しかし、そういう経験や知識は、余呉の焼畑では役に立たず、やってみないとわからないことばかりだった。ここから引き出せる結論は、自分はわかっていないということである。そして失敗に学ぶということである。もし、謙虚にならねばより多く失敗する。謙虚になる相手は、地域の人と自然、その地域の気候・風土・生態系、作物など、数えだしたらきりがなが、焼畑の実践は、そういう事柄を教えてくれた。

5.2 実践型地域学と主体

安藤は、『『地域とは何か』を分析的に描き出すことを目的とした一般的な地域研究と実践型地域研究が異なる点は、あくまで実践を通じて地域を理解し、地域が理解されることで実践が促進されるという関係が成立していることにあり」とし、「実践は問題を克服し何かをつくりだすための行為である」と規定している。また、「その土地で暮らしていこう、生きていこうという覚悟や自覚をもった人々が助け合い、ネットワークをつくりながら暮らす土地」を在地ととらえ直し、地域に暮らす人、地域にかかわる人、すべての人に「在地の自覚」が芽生え、それを具体化していくことこそが生存基盤を整備する条件となる、と言う。ここで言う実践は、研究者単独ではあり得ず、在地の人たちが主体になることを前提にした、人々の暮らしの持続性に関わる事柄との取り組みということになる。

実践型地域研究における実践には、このような文化・社会的意味がこめられている。むろん、それもまた、実践の中で確認し深められていくべき概念である。「在地の自覚」は、「在地の知」の発見技術ないし方法でもある。なぜなら、相手に尊敬と愛着をもって眼をこらさないかぎり相手は見えてこないのであり（黒田 2002）、「在地の自覚」は地元学（結城 2009；吉本 2008）と同じく、自ら暮らす土地や在地の人々にむけるものだからだ。

といっても私たちの実践は、「実践は問題を克服し何かをつくりだすための行為」であっても、まだ、地域ともに「何かを作り出した」といえる段階ではない。そこに至るには、対象の地域が対象でなくなる関係、自らの「在所」と変わらないような関係に近づくことが必要と感じているが、それはもうしばらく実践研究を続けたいと結論できないと思っている。

謝辞

余呉町での焼畑を進めるにあたり、多くの方々にお世話になりました。とりわけ焼畑指導にご尽力下さった永井邦太郎さん、佐藤登志彦さんを始めとする摺墨集落と中河内集落の方々、夏の厳しい暑さの折、焼畑の火入れの加勢に集まってくださった地域の方々、ウッディバル余呉の方々に、厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 青葉高 1981『日本在来野菜の系統』法政大学出版局
- 今北哲也 2010a「これまでの火入れ、これからの火入れ」『ざいちのち』(実践型地域研究ニューズレター) No.22:2
- 今北哲也 2010b「朽木フィールドステーションの活動概要」,鈴木玲治編著『ざいちのち：実践型地域研究中間報告書』京都大学東南アジア研究所:21
- 江頭宏昌 2007「山形県の在来カブ：焼畑がカブの生育と品質に及ぼす効果」『季刊東北学』11号：106-116
- 江頭宏昌；岡田夢水；赤澤経也；小野寺弘道 2008「山形県在来カブの深播き抵抗性に関する系統間差異」育種学研究,10(別冊2):178
- 賀曾利隆 1983「滋賀県湖北地方 姉川水系上流部の焼畑」『日本観光文化研究所研究紀要』3号：12-21
- 環境省 2011『平成23年版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書』環境省
- 黒田末寿 2002『自然学の未来—自然との共感—』弘文堂
- 黒田末寿 2007「火と牛がつくった風景：高島市椋川のホトラ山」『人間文化』vol.22 滋賀県立大学人間文化学部:12-18,.
- 黒田末寿 2010『ざいちのち』(実践型地域研究ニューズレター) No.26:1, 京都大学東南アジア研究所.
- 黒田末寿；今北哲也；増田和也 2010『『くらしの森』を再構築する—火と水のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくり—』鈴木玲治編『ざいちのち：実践型地域研究中間報告書』京都大学東南アジア研究所:22-28
- 島上宗子 2011「コオロ焼き」『ざいちのち』(実践型地域研究ニューズレター)vol.38 京都大学東南アジア研究所:1
- 瀬川欣一 2000『ふるさと鎌掛の歴史第3巻 激動期明治維新より昭和30年町村合併まで』サンライズ出版
- 竹本康博 1991「湖北の焼畑と赤蕪」『民俗文化』332号：3716-3718
- 橘礼吉 1995『白山麓の焼畑農耕—その民俗学的生態誌』白水社.
- 同志社大学民俗学研究会 1969「調査報告 滋賀県伊香郡余呉村大字鷲見」『伝承と歴史』5号:37-108
- 東洋大学民俗研究会 1970『昭和44年度書き調査報告 余呉村の民俗—滋賀県伊香郡余呉村—』東洋大学民俗研究会
- 六車由美他 2007「焼畑、その過去と現在—多様な可能性と火を介した自然利用」『季刊東北学』11号：6-26
- 結城登美雄 2009『地元学からの出発』農山漁村文化協会
- 余呉町教育委員会 1991『高時川ダム建設地域民俗文化財調査報告書』余呉町
- 余呉町誌編纂委員会編 1995『余呉町誌』通史編 下巻／余呉町役場
- 吉本哲郎 2008『地元学を始めよう』岩波書店